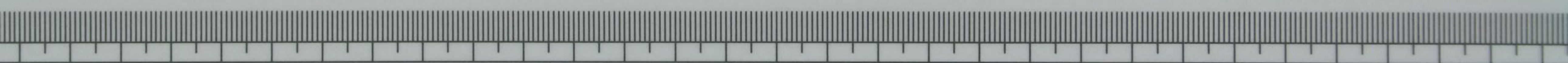


志よ
 志ろ
 あな
 諸家宛の
 宛

~~G~~
 56

逍遥文庫
 文庫6
 250



25

30

35

40

45

50

文庫6
250

諸宗大學

八宗兼學

諸宗

旨好曰大學諸

之秘書而諸檀

入觀之門也於今

可見好一人為評次

蒐者獨賴此篇之

存而春益次之好

者必由是而論焉

則庶乎評不差矣

叔母の里中（いんちゅう）にす。立役実惠（たてやくまこと）女（に）飛（と）
（た）と（と）立（た）を（を）と（と）ひ（ひ）く（く）す（す）て（て）法（は）の（の）
（た）呂（ろ）惠（ゑ）す（す）て（て）女（に）飛（と）を（を）徳（とく）宗（しゅう）と（と）す（す）る（る）れ
（た）一（い）本（ほん）立（た）て（て）く（く）や（や）す（す）か（か）り（り）廿（に）八（は）女（に）
（た）の（の）新（しん）女（に）御（ご）仙（せん）の（の）ゆ（ゆ）と（と）書（か）す（す）一（い）と（と）書（か）す（す）
（た）な（な）ま（ま）バ（バ）け（け）立（た）を（を）と（と）ぬ（ぬ）が（が）ひ（ひ）子（こ）舞（ま）り（り）
（た）な（な）ら（ら）る（る）と（と）ぬ（ぬ）息（いき）よ（よ）の（の）ぞ（ぞ）ぬ（ぬ）れ
（た）ら（ら）い（い）新（しん）向（きやう）と（と）ぬ（ぬ）月（げつ）さ（さ）か（か）け（け）ぬ（ぬ）く
（た）かり（かり）よ（よ）日（に）が（が）る（る）去（ぞ）天（てん）空（くう）と（と）立（た）を（を）と（と）す（す）
（た）け（け）す（す）く（く）斗（と）り（り）た（た）ら（ら）ふ（ふ）と（と）思（し）ふ（ふ）
（た）下（か）ま（ま）す（す）と（と）思（し）ふ（ふ）

諸宗評判記

惣宗有目録

員員 日本國中 諸檀方中
 評判 八宗九宗 惣條中

▲立役之部

○又立役は地名小考とあるのど

立役巻次 極上寺 天台宗 唐土宗

切と云はるるは唐土宗の留士

大上上寺 海土宗 日本宗

一巻の立者といふは此の東山

上上寺 禪宗 唐土宗

上
二
黄檗宗あきく 戒南宗あきく 六波羅宗あきく

上上吉 真言宗あきく 天台宗あきく

南あきく 蓮あきく 宗あきく 法あきく 西あきく 流あきく 日本あきく

上上吉 托行流あきく 日本あきく

日本あきく 宗あきく 律あきく 宗あきく 天台宗あきく

上上吉 律宗あきく 天台宗あきく

法あきく 西あきく 流あきく 日本あきく

上上 一流あきく 西あきく 流あきく 日本あきく

西あきく 山あきく 流あきく 日本あきく

上上 麓あきく 僧あきく 日本あきく

上上士 華嚴宗あきく 黄檗宗あきく 日本あきく

▲実興之部
これ宗あきく 蓮あきく 宗あきく 日本あきく

上上吉 日蓮宗あきく 日本あきく

白あきく 服あきく 宗あきく 日本あきく

上上 念佛あきく 日本あきく

上 題目あきく 日本あきく

上 百万遍あきく 日本あきく

蘇の山人ふかきらぬ一月田

上上吉 尼 寺 唐古尼

玄妙のりまのい三年ぬせ松島

上正 嘔比立尼 日中尼

▲ 善流秘之部

上上 彌 弥 夜古尼

若僧の陽治も夜舎に在る

上上 去云小僧 天竺尼

又身まひびりし眼りやまゝ空名物

上上 隆古不化 日本尼

日甚小僧 日本尼

上上 一向の宿 日本尼

▲ 教巻軸

法相家 天竺尼

三 倫宗 天竺尼

▲ 休之令

上上吉 成実宗 天竺尼

又身古の善附ふる向とあれぞ

養子ふけの善の由り

上上吉 俱舎宗 天竺尼

三井寺子家の元付にと斗り
少く新表の比折りてり

初夏の縁神皆さびしく夏音

元日やまれく花と物候と縁に

一夜遠ひめて暮るとあけの空

二三月も遠ひ〜ま〜ま〜の

指しも笑をぬくむ〜と本深を

志すまのりも芽つとひとの心故

よあわつとある神宿も秋は

例の知らき神のやぐみの有難さ

夜ふ心生ハたれむ〜うらあらす

あ〜も〜く〜まのま〜小平

いふ者ありつ〜あ〜き〜まなく

店主人のかりもあられば大層扱

こ〜い〜ま〜な〜し〜と〜ひ〜ま〜

をよむり〜世をかる〜受〜

あやうた人男はや正月二日しん

ひとりもの〜さ〜ら〜ら〜食

むらふん〜め〜た〜ひ〜ハ〜の〜せ

くらむ〜せ〜あ〜て〜今〜あ〜れ〜

え〜い〜ち〜ち〜ぐ〜西月とせん〜

を物ひき切はか〜あ〜て〜万張

長巻の心よ〜あ〜り〜灯あ〜さ〜ら〜ら〜

香より門の戸を引メ指立者。
大いなきおこしちやいれち。
氣もおそれんゆもやら思ふ。
床の留れ上よてあまやう。
すい登人くそのそひせのこびと
見えバ、喰指の牙をちつくと
かまぶらう。七人奉立よ愛ひ居
て有れば、本のまこいあ
は大皆我あへおし延
何れ目あてよいゆの表の
お指立と門ちびすくハあまお

何れもせよ知てありせハあハを
まがも天徳ちのやうよく
元とバ七福神なり。是ハなまそ
あつて、おれも志づまりゆり
聖しあつて、廣文堂よよ六
大思ふと初め、おり玉人あぐら
福喜をさづらあう大後ある子。
布袋和尙、佛仏を依り、政を
丸め、そと礼生へ何福を換られ
もつゆすと、ゆを、徳文の子供
は、あつて、そよぎのちなりて

本のもゝ小平正月二日
幼をせえさふ

たのき
よれ

そびの

稀す

えんあ

さ然

於の

あまの

かぎのよき
うさ



と海おとちよつと心せくあつて
後神の中あつま入つれごと下つより仏法
のなまんと切くまつたから
ま由と一ま救き除りを持くいの只神しん給たまは
もぬ入いぬかくたたいい仏ぶつ法ぽう
ひのののババがあらうがいはして
かていくがはき合信ごうしん人があらはまま
てのゆないまして今いま未ま知らず
下げ根ねの付あらう先生せんがせらう
こと岐ぎ五ご法ぽう同どう又またハハ神しん信しんをまん
中ちゆうくちゆうううがこううのくあいる

があらうもいらく又また風ふうを
して一派ぱいをも建たててままいら
むが今いまより遠近えん一いて布袋ふたと
家かをとり去るは振ふりせぶもごさ
むらるまひごうそろろ等らと
て今いままの意いを入て下され
といつもふことあてけいつ人が
後ご又またならむみのまびもあらず
夷いもまあらひまやどうんがまか
りらむのならずそままとつちよい
とがあらはまの元もあらうんて

やうあまびいーとさるるかゝる
びーやう天出く如彼先生のお
せぬへ皆くもは心つてそまがば
とい子伏い歌えへくして化をもと
へいこもてかえよう。故今布袋を
のとあゝの悪りおらが教道おや
かんのひもあられおとちがうく
きしい字音のぬよよんら中
垂りのなうづく字音の淨判
とてつてえよよんておひもまひ
りれがまかへ先へ何のうらば

淨判の既長ハ布袋をたがおるるせ
よからうきあくとせがまれと布袋
おとへらくとまがとそらま
陰くもくくくせんあゝ何よ
まうせ淨判とあま志よとく
より子淨判を交結へてかーと大
皆我もくとおくく門のこい
悪いやくと蘇集はるあひま
このちへ運入あされまをくお
東西く東う西く
了得に参乙書

▲ 立腹之部

極上上言 天名宗 海去在

元年初より後そのひがふつと

のふぢい名人 海去いき かつちの海

去宗をおいづくば人を喜ばぬ其取

取引ある其がうめんごませ

弾正のき いやし かつちをだぬ心宗

の御宗をおき並せ 去ちひき

去ちまて急をおびごまに宗を

さきくゆせ 秋五 にかくぬを

かつちの宗をまもよまけおらる

るひすこーもぶさりませぬ能ー

こつとよくお波をきれませ 高村の

でのあさり 天名宗 十月のえさ新

十のめびきすふえさうりあうら

海去の取立ぬいーませぬ其を

おのきの中はせぬたえ 立腹の取

まもとやののたのとす 海去の

えさきこれだん かつち中取はへ

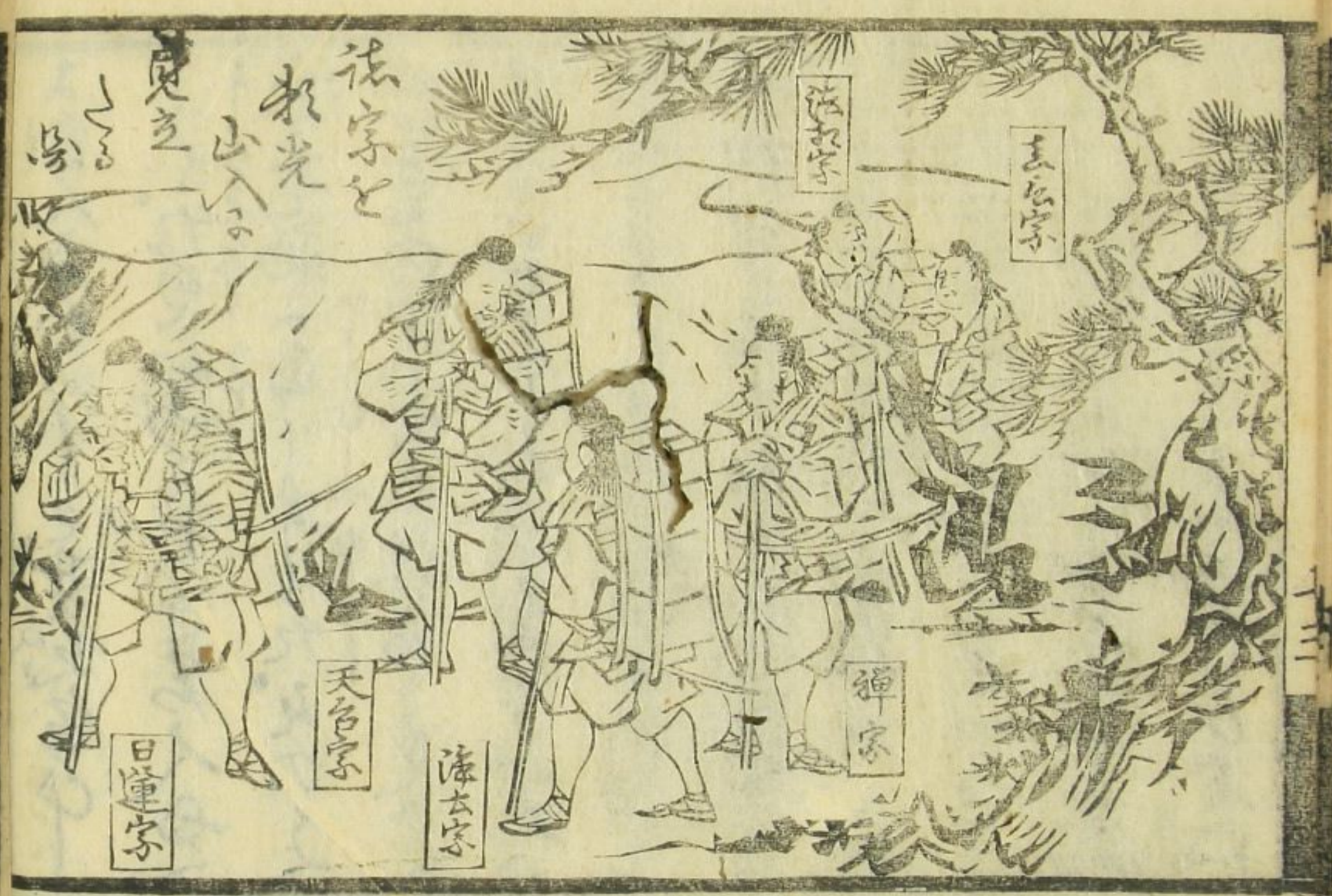
こつちりませぬ 天名 かつちのあ人ハ

あひそゆく後判を能あく 海去のき

こつちの法お宗をばかしくいぬ

あつてまふ字を巻改よあまふ
ごうとせし 既 是れ 一 事也
此の心あされし 一 事也 一 事也
てあさりまふ 而 絶法お字の天台
字とあんと 一 事也 一 事也
あつて 一 事也 一 事也 一 事也
と 一 事也 一 事也 一 事也
ま 一 事也 一 事也 一 事也
今 一 事也 一 事也 一 事也
い 一 事也 一 事也 一 事也
人 一 事也 一 事也 一 事也

よ 一 事也 一 事也 一 事也
ま 一 事也 一 事也 一 事也
あ 一 事也 一 事也 一 事也
に 一 事也 一 事也 一 事也
ま 一 事也 一 事也 一 事也
が 一 事也 一 事也 一 事也
判 一 事也 一 事也 一 事也
あ 一 事也 一 事也 一 事也
つ 一 事也 一 事也 一 事也
家 一 事也 一 事也 一 事也
相 一 事也 一 事也 一 事也



室の端に室門亦有亦室の比
門とて言ふ事と神とつよなる
あつひ合ぬ神神のまこととあ
せての實の位有てたけく人の
おとすも不實のまことひいま
の世の美人はははははははは
おめよがなんんんんんんんん
ヤイは人ハゴゴが笑のまこと
た比互いふあんとやじ三井の
おとし天言なるるる花おの
の大おまハ三井の智徳かゝる

自の大おまハ三井の智徳
飲飲自は夕念仏持實難ん
たものせを破とハ妙もを破の
仕亦ハあくるん衆正せりる
實徳のまこととてははははは
んんハ念服なりを昔ハ非樂
がり又ハ衆亦傳たごも實徳
おの大高りなるれハ今ハ實
事化のくおハされど昔の
衆凡のそりえそくを實より
荒實がいまのりてははははは

そのりあふ菅束の冠合戦の白
矢やどきついで彈刺天皇のぬい
人花のさうまよ千夜満まを一
めよえんそひよよか度くくと
したたゑふとあぶるま八分よ
ないだ法宗の毫紙く

本上言



淨土宗

日本

ひきさめくあつちのあんとそ
さまちや滅よ三子名の名人を
彈刺よからつあやい三子やい
比中人の吳をたへのぢつまた

三子名の名人よハ吾長ふゆをれ
よありこのちのまふ宗ハ吳を
へちまて付五筆の大島ゆ
あつぬをそとちのちのお人がく
りんあさるよひりく選釈集
お父宗のあきふがふひよ
得判をたよ仏學と云はる
父陳よあふて来よ其の親
玉と先へひきひき後なる其の
みえまより物と也仕打物との
あふよあふたを短くばごとくせ

ぬきす美はせしんごがぬ人あり
天竺徳孝請を忠臣又出ころが
選教條の文字のゆ。それ程の
本を志すかひで一流の志者不
たしきまのちびまは心よ深む
ふまうせてかまし。素也この
ぬの人によあまさればあかち
又字のせんさくはいつぬせんな
るをぬきす。今まりこがで
字旨からの底ろ仏み。こま
こますなよ。是はさうでま

アまひ。後ハいさひの場志や。た
りませぬ先評判を。おまあき
ま。ぬ後ばか人ハいさで由
高化をたなれぬ。お氣なれど
龍樹三奴ぞんらん道弾呂導
たどく藝風かあ。のたれバ三
ヶふのぬ人とまへも大車合い。
お又去字の肩号を唱三奴評を
たんよそり。正雜二は。正七つを
まて。海七門。よもちひての流実
らり。強りた。大易。なる。の。和。実

どのつをらま〜その住おふま
 つくはまぶざりませぬわち
 大系も他刀を仏の家におろ
 さんよき本へ花乃より血字の
 表ならしくのうけを八塔くが
 焼くがります時又花道の中程
 まで持田周投ありの長せり
 ふい波ありく相りまは出る徳宗
 を却りくくまふ進んやらま
 のまゝのよき次のまゝは徳宗
 又さへられるる系の勅命をうけ

後井元彦のやう〜すう〜ハゴ

うも〜徳人がなま〜をあげ
 ま〜まより決のらまふ
 のつての仕うち又そのうち神
 村くさの太あ〜の丸平伝
 あり大系のおく〜ハたれも
 かなはま〜ない人〜
 まの〜〜医者のまの〜
 表をおりの表ハ〜おあ〜
 表これハ〜〜ま〜
 人よかぎらず徳宗をばせんぎ

あれはいつくもおろす秋の
夕ぐれがさああるごきり。そのく
百五びんかけを仏又ハ十夜
ふどハ切かき。まぐれ
かりまは高世のき。後共御
大僧正名の人々

上上吉  禪宗 庚子年

心 徳等 説法といふもあ
義外別傳ふき又字の文を共
古風とバズづさ成如か
ハ。ちとむきり。の。なれども

まこと小年集のおり。る。
うきよとちりり。えと斗り
の。小ぞおせむ。悟るの。もづ
よさを。心。傳。心。見。性。悟。悟。悟。
の大名人 **まをひま** あらが

心 徳等 説法といふもあ
義外別傳ふき又字の文を共
古風とバズづさ成如か
ハ。ちとむきり。の。なれども
おとりのハ。む。む。り。ま。せ。ぬ。そ。内
は。成。人。ハ。中。り。彼。者。由。ハ。家
ふん。で。ご。ご。り。ま。す。由。ハ。家

出とすた又にてまの巻
臥と巻と軸とあがりありませね
けんの巻もまづまると
いいなく異い言ごへん終ひのけ
いい介け子し佐さのない大あこり
[ヨ]ヤイけんハハられてより
ままきくと評判もあく下下交交
それぬばいあくくて今まんが
うれくぬぢやないり [ひ]あき
あかいもありあままくせぬ
とどのほうのからとら

蒙もうの大徳とく者しやの中たかりの大
あまりハ月まのくぬう又又異いこく
産うてハ梁りやうの天子てんしハ吾知しくの
久くんんもづよくを後世あのえ
のけいと高たか比ひ子し元げん是しやまの
おもてもあまりつたたのなら
去く租そ實じつ羽う衣いの大當たうりを
きいとうやいアノあわらしめたま
ゆめをぬりまと一下か指さくうまを
[ヨ]ヌスのならうが終一ひを
物ものをすすあるあち一きをとら

持りてうちてあしき事のみ
一世の多生也よいか今ハ花を
風月天ひつらり地むらりさ
ちんかん人のなをのときよか
まゝいといふち教すもさかた
よつて人のあるまじき本割
ふんおまゝあとの養生がある
改^改申し^申く^く 丈ハ内徒へ^{内徒}とち
入て^入ま^まき^きの^のお^おた^た川^川の
なき^{なき}也^也登^登て^てい^いま^ま千^千の^の地^地も
あ^あの^の完^完も^もす^する^ると^とあ^あら

まはげくのたげもつらゆので
あざります。完だうりなすも
評判をいさくあきれませ。扱
け人申^申花^花の^のあ^あら^らく^くは^はあ^あら^らび
系加かすくら又むぶとて
あかしのあしくの飯者もよ
ないの^の北^北典^典至^至聖^聖の^のあ^あい^い連^連
あまげいの外のおたしあ
そ介せうきんる^いく^くあ^あら^らん
清^清信^信洞^洞又^又ま^まら^らあ^あら^らん
へんぎん又を^をの^の波^波為^為の^の月^月の

あちどのいめくさん毎もを

あぐくバなまのま ま

いこやらのあんとぬりてけ人

の飛入るハおろろるさ 法

えうとあいられがまぜハな

い アアノよあ人ハあま

いあされずとげいひやうとあま

あされまーえいの入あまざ

のあれーしきま あままで

三 あをあげま あま

る あまの大人 あ

あ あまの あま

あ あま あま

あ あま あま

あ あま あま

あ あま あま

あ あま あま

あ あま あま

あ あま あま

あ あま あま

あ あま あま

あ あま あま

用びやけいしあひあはれ
 けい人のまじのようはなまは
 あまりをいささかのひあまの
 けいあしりまをそれいそ
 あれかぢの古砂どきまをちやちこ
 ぢつていふのがじまあくと
 ありまの介子しよはまのさいじん
 まより入宮いんぐうのじん まをく
 くの入宮も合あまぐいぬおたひ
 のちぞらぢつといつゝぐ楽のやま
 ぬけいぞ今いまごらひあすまきの

よしイ勢たてたの〜んでいら
 えもあはれぬ又を方で岩いわさう
 家いへの仕しをハぢぢぢぬた〜く
 ま〜言こと花はなひび〜也やふぢぢぢぢふ
 ちまあそ〜れて和わくくか〜と
 ま子こ家かふかぢ徳とくふ〜い〜ぬ
 と〜るもあ〜い〜づ〜るぢあつて
 海州かいしゅうまもまをまの〜人ひとを
切あゝ〜氣きハ評へい判はんとせままあ
 いぢりりま〜ぢぢ〜つ〜お合あ合あ物ものあ
 於お子こ勢せい後ご古こ茶ちやとあま〜ま〜れ

祝文のちるつせごまたんよて
九字せ切りけえの荒るりそりく
びん人の仕うちハ本尊がたして
久あつた
銀羽衣も持あこりおかくごま
今せふ一志人のきせう人く

上上書 ㊦ 推行流 日かた

ひきびんハキ一七件ま。夜
のりあ。又あ。くりよ
みぢ人もな。あ。ひ。のま
げのゆ。く。く。ハ。り。り
初夜より念んあ。ち。ハ。ミ

くま。ハ。ハ。を。ま。れ。ど。り。く
か。も。あ。ま。き。く。あ。ん。人。く
う。れ。り。ま。ま。あ。世。の。後。者。と
り。び。ん。く

上上書 ㊦ 律 宗 天竺庵

八八字のちるつせごまたんよて
三志んめいよん戒律堅固の徳を
せうごうまのり小宗二百五十戒ある
おハ二十の戒よりよそをあ。く
てんごう天高教のまのりよそをあ。く
きく禁戒ねづこりも

上正



薦僧

日本在

[記] おくむういひげいたさすがハ
おさむいひと又いすす[記] 本古
川本流の中より出りて、そむら
あふれといへば入の内よりこらう。
そらうふむくまやぐまきふ余り
よふをい、又白むくをい、つよ忌
て大なるあや中まきの天八
ふくろで茶やまてかいたの色も。
ちとかくびが出ます。そとま人の
[記] のとつうひまぎんうけ中[記] ひい

ヤイといつらろくのこのをぬり
ま。たこまのよとあまをのぐじよ
[記] 取をく、孫別がかんじんを。お
ざりますね雲中んちう人まけふりての
中ちゆうまきちうく、次のまきが出
くくバ、款うちえうくと皆くが
まつておりました

上正士 [記] 華嚴宗 夜まを

[記] ひい 八家のうちおてハふるまひ
去をんぬり出して、いふく、のまへ人
をの、大和風止ちんのせをまへ出

らんしんぎんて評あること

あり大波のときやまあふ

上上吉  黄葉字 庵をた

 おやりの付くはづれじ

ありもありをよなッ人ぞ有

ながたるころついでおまきのぞく

されども天人の又と外よあし

まろく切おとりの又おがらけ

しんねんさきしんねんさき

後倍おどよなるとおまきんが

まろりんのしんまのぞくおや

六百飛人の大なるをよの

大南りおとりのつりよめ

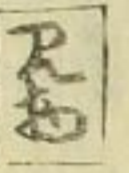
夕のひま又一流のまののま

南にありまろふに下あうあて

おしんろ

▲ 実悪く教

大上吉  日蓮宗 日蓮を

 一楽やぶのあをも喰合て

すいぶんあふよけれど表面の

いりこわいれまの立改元

出合てもすこしもひるます

吾弘を君釋人まま云てこく
 律をどく。後字早ゆたぢぢ
 てくの根元法衣一人の加化の
 あくこころはせけんてりよかか
 毎けいとりのものあんあふ
 あらよりよ下おわ ひきたまれ
 けり利くらうあくええぶつら
 がてんまものりのそりあめ
 志よろこがおるうう大足入 ひき
 東あへく又けんをとなされ
 ますうますーや相けいん ひき

天を女の事子まじあれども
 一流やうのそとの五風そのと冥
 東のいかり甚居より出あひ
 ありよのたび甚居せつとあて
 出さう。より何あへ大甚居へ
 出て大立矣とありあへ相げい
 津あまう何さうあ大越にケ交
 ありあへかづあれはそをなへも
 いつぞや由井うたまよてその
 死(あせ)りても不憚り命と
 心をひるぶくさぬよづよき仕打

そとまきち刀とちさり〜ちんへ
まわり まおつと待てのい
まよふの〜まのまより車車
福のまきひりりのまきり
ち刀がじん〜まおことまハ
うそ建えちやうち大免くさ孫師しの今
びよえあぶかひ今ひろい衣
かひとしちやう洞をこび〜そのれ然ハ
今よあふ人の知〜ま 切
ま〜〜まち刀ハじん〜ま
おれそれバとんさ〜まぐも有

介すけも役人やくにんもあれバて下したのじん
あいなまよつて待まちねハる〜ぬ
又大免くさ孫師しの今いまんまもせよ
志し而し氣きがじんかあよあふ付
たれがいのちごひをまのの
お〜い者ものたまけ〜いと思おもハれ
たまよつて今いまごひある〜
他宗たそうよまきせらうおもそれと
ワハ徳とくがた〜てある者もの也なり
正せい法ぽうかげい也なり今いまままきく
えんド〜まを〜まあひて

又おれアノあやうぬ 言 あい
まーやあやうさ然あづちらん—安古倫
の大ぜんす子ぜんす信ぜんす女ぜんすのやくハ大ぜんすのえ
たきそのうんといくと大工もあきれたし
て何なんとやういふ寺てうの強えんガハを
たずされなんらうな 信 又ぬ
すう是のぶらうハ信のぶらう長のぶらう公のぶらう日のぶらう孔のぶらう人のぶらう—うま
いらん者なんてまりさんとあま
よつてが—のおをたてまけま
させまよりハ日なんれ人なんあうの
同なん善なんは信なんとるふハあがてり

ぞくぞく— 相 仏あまを世せるもに十
余よ子この未み乳に志し實じつと云いておこの
強きやうの皆みな方かた使つかりて法ほつ花け強きやうハ
一切いつ強きやう且かつ大だい勢せう妙めう典てんの志しのげひ
けい入にをまゝくつふやつハハカ
ぢごこの下したづこよならうか
いや 契 イヤあまさいとひ法ほつけ
強きやうの一切いつ強きやう王わうのたれも皆みな志しつて
いれどおあま—あまのいおま
さしれまらういよまうなまき
うまにまらういよまらぬ 法

皇法げらんさうりとさき御誓の正種
を子のいられ〜またぐひをう
るの今までのあいにん人並を
あゝぬらんまじりなすも切筋
からぬあけこのけり無きとあられぬ
あゝ〜もづううずあしむ
べ〜むとらあゆが有とうあ
言をのけられたらよからら
見おせうきされば時をきて上りの再
買日れい違はてば法花經を弘め
あふ何と云てもまよ花人のすくふが

大名へののうあか介の立役元より
けいんハきん澤出家とあいげひよて
おとろふよとやい強合の
たてがしんありのちひあ家のまへ
志やうあつころく妻あ女中志也の
ひあきがあ〜してお社会をり
又塔ちやうの月のそ御使家利益
ありてうい改宗をること
一天に海塔うい法介あかようづく
ものハないだこのう〜あ〜の
大名へ〜

上上 山 伏 昇 鹿

伏ひたまことよ夜やのさむそくの夜あ

をかつぎなされてがーらも

そしずさしずさ刀やのままれらよ

そすりけ外あのま摩ま路ろ伏ふの

ぎよよままららげんげぢぢううああのの

おやお言ごおおめめんんのの海うででももいま

時ときのの心こももああるるよよままああも

とれてとななままままひひののここ人にののより

大山おぶぶーーのの一い人にぬぬししののここららままるる

思おもはずずぞぞししととまますすひひををららおお

ここららままるるびびままららののここ

礼れんんののややままのの舟ふぞぞのの

げげららのの出で家かくく言ごままハ

けけららののすすはは女よららや

子こととのの糸いとててらら糸いとへへままててああるる

がいがいととふふららかかををららいいああれ

でもでも実ま憑あれれややらら率ひががままがが

ははいいののおお憑あれれ言ご元げんハ

そんそんかかるるむむららららつつててままららいい

ままババ憑あれれままららりりままままよよままらら

ささああーーたたまま一いととああーーと

かくめくの實ゆへにまじひのよきゆ
 又あつこの實よて年々のわん
 實ゆへにちうじんも有て面白
 むづつとをばなつてつらば
 まつと世をあらはれらるる人
 志あまかひひゆ今實惠の天一

上上 ① 大峯講 日かた

えおんまひのでまののまでまき者
 うたれもの久人のゆがも老おや
 にもくづれまてあふらるる人
 さんげくとちてあ志ざしの

てのうちにやまるとすむなつけ
 えで一律入のあくらさつきお
 ことぬごうとあくらさつきおのよハ
 い初ハハ終るる人ぞとつて
 けえんか中百ハこまいあまよ
 だつて和来やらくまハ終るる人
 とくハあつらや去でつちつれで
 ぬけまらりの世法やまがあごと
 又世のひあまき又ハ何やかやら
 ころんをせまをやく中もも實よ
 さむしひら〜くたあり大お

まへ渡人とあるは、いさ久しい
もの、又あづきよして大衆もろ傳中
とよせてあつりよせと云ふのは
すゝめ^の茶の 西元あるやど傳せの
まのりあせハ、く五まゝいりく
は、いが、いくぞきて今いままはるか
ゆて女のものの、まついでまついで
ありまま 西元あは大衆傳と
中あちちハ、いちぢうはいちぢう
どもあれは、いちぢうよりあつて
大衆ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

後てのきそうを、いちぢう
くハ、いちぢう、いちぢう、いちぢう
あ、いちぢう、いちぢう、いちぢう
く、いちぢう、いちぢう、いちぢう
茶のあ、いちぢう、いちぢう、いちぢう
ぢぢぢ、いちぢう、いちぢう、いちぢう
さんげを、いちぢう、いちぢう、いちぢう
ぢぢぢ、いちぢう、いちぢう、いちぢう
き、いちぢう、いちぢう、いちぢう
ま、いちぢう、いちぢう、いちぢう

諸宗寺々獨案内 列 在冊

比去ハ所府内ひかりの徳宗寺とくしゆあり

寺とくしゆと東南南みなみ山やまにおくち

及また順まごよりく山やま或ハ

何方まじの事こと又ハ編あ十用じゆ山やま共

ららくくおお化か一いちをを外ぐわい地ち内ない

社しゃ仙せん園えんとと効くわう徳とくああらら

寺てら山やま号ごうととののここららずず出でああら

りり一いち中ちゆう

徳宗評判記中ニ巻終

徳宗評判記中ニ巻

上上吉直 真言宗 天皇

ひひききひひ徳とくハハ本ほん教きやう之之年ねんののすすハハ

矣いそそくくたたへへののああららままててもも大だいあ

ららりりのの切きりととりりてて名な宗しゆとと勝せう

勢せいののなないい大だい名な人にん一いち言ごんもも徳とく

ややららままんん年ねんををああららままるるはは代だいををままのの

いいふふををままささくくよよままごごままめめらら

今いまののつつままらら何なに令れいととややららままをを

ううららまま一いち年ねん一いちせせつつきき一いちはは町まち家や

つつああららまま一いち年ねん一いちせせつつきき一いちはは町まち家や

ありどこのめくさへをも
 若であくばなまのまの ま
 いまやらああんとぬれは人
 の義 ゲイ 人 じん 百 ひゃく 八 はち 十 じゅう 九 きゅう 法 はふ
 とうとうあいつれがまぜはな
 い ひ アノよあ人よはあま
 いあされずとげいひやうとあま
 あされまー先 せん の人 ひと 長 なが まざ
 の の ぐれ ぐれ ー き ぎ ぎ 地 ち きん きん ま
 三 さん 結 けつ と と げ げ ー ま ぎ ぎ ー ま ぎ ぎ
 ー ま ぎ ぎ ー ま ぎ ぎ ー ま ぎ ぎ

及のくよふあらの并 な たり
 びとあまあびさせ つち 火 ひ あり
 の の きた きた け け ー ま ぎ ぎ ー ま ぎ ぎ
 橋 はし 孔 くわん け け ー ま ぎ ぎ ー ま ぎ ぎ
ま かつ かつ ー ま ぎ ぎ ー ま ぎ ぎ
 ー ま ぎ ぎ ー ま ぎ ぎ ー ま ぎ ぎ
 子 こ 始 はじめ ー ま ぎ ぎ ー ま ぎ ぎ
 あされ あされ ー ま ぎ ぎ ー ま ぎ ぎ
 も も ぎ ぎ ー ま ぎ ぎ ー ま ぎ ぎ
 つ つ ぎ ぎ ー ま ぎ ぎ ー ま ぎ ぎ
 ね ね ぎ ぎ ー ま ぎ ぎ ー ま ぎ ぎ

神皇正統のちあつたをこそまた人として
九字とやうけえの荒るのそりく
ばの人のけうちハ自身がたして
たまはるや
細柳安もおもひくおかくこそぎ
今せふ一人のきゆる人く

上上書 ④ 推行流 日吉

ひきばの人のきりそゆるを
のりあし又あしりよ
みぢんもながしゆくひのきん
げのきりくともくはらりよ
初夜より人あしりハセみ

ぐまのハ内をきされどいづ
でもめききづいあしり人づ
うれしがるまは高世の故者と
いひばりく

上上書 ⑤ 律 宗 天皇

ひき八家のうちをききり
えん人めよしん戒律聖園の輝を
さうさうまのり小宗二百五十戒ある
おハ三千の威よりあしりく
えん天皇教のちひさく禁戒り
きく禁戒わづこちも

ねづきけさ夜のちもねづき
よとくあつれて膝く一あうの
去まりももありあふ人あれ
どもあ〜ゆりあつすぎえ中ハ
うけりりりりりりりりりり
らぬあづらなびりあう中りり
く〜てなき〜と大彼もなく
後宗の去まりをりりりりりり
まきのびりりりりりりりりり
あ〜のこ〜もや

上上



鎮西流

日弁丸

法宗洋判記下三巻

▲歌役之部

上上



頌人

日弁丸

既いづれの分子をどやうひよ
つ〜ゆ〜れ〜よりだげ〜洋判り
よ〜と大いき〜ぬ〜人ごりの
水おひ判りもの〜あひ付
大小のあり〜ら〜入さつらの
あ〜とちまきハ〜ま〜ひ〜
法えあ〜し〜ひ〜し〜は〜し〜
は〜ハ〜ま〜げ〜い〜ま〜あ〜も〜歌うたや

よのちやうのゆく〜すむすめ
けいんよつ〜かきや〜ハナハ
名人加表あゝあゝ何ぞかなされ
ても、夫〜もあせ〜もが余り
あせすきえ、ま〜のいゝるらん人の
ぶつせうつまごひいあり稽首ふんけの勅化
原ふあり〜ちたれどまことふ
〜んふ、評判りま〜りつ〜ま〜
あ〜がさの浪人うらあぞのげいも
有よ〜ねんがたまらなひぐ
きん〜るゆよ〜まを射て

志ありきこまハ社い従いよりのまのまの
のどもあらしうい又いけい人あ故者の
中いのりあ〜どいあ〜やだハ
〜いあ〜やう〜のあ〜ら大
海いの〜いあ〜の〜いす〜
やうでいあ〜ど〜がすいはらちハ
まゝあ〜あ〜何いハ〜もあれ
あ〜あ〜故者い〜い〜い〜
〜いあ〜いあ〜あ〜い
あ〜いあ〜いあ〜いあ〜い
あ〜いあ〜いあ〜いあ〜い
あ〜いあ〜いあ〜いあ〜い

しんぎとあぐげいひやうく
[見] ねちうごうの佐々あざり
大あつり又ちよんがれくハ
まつらう藤原がまもく一佐
おゆえのまもくハかま
うまのくまのまもく

上上 ㊦ 大拾遺 日本

[見] ねちうごうの佐々あざり
あぐくくと一流のあま一あ
名仏と中まもくとあがの
まつらう大まもくとあがの

ちらがあまのまもくハ
ねーげい大あり [見] ちよ
つとやとえいひ大拾遺ハ
あんのまもく [見] まもく日
あまのまもくハあまの
[見] まもくハあまのまもく
今えんがはあまのまもく
あまのまもくハあまのまもく
あまのまもくハあまのまもく
あまのまもくハあまのまもく
あまのまもくハあまのまもく
あまのまもくハあまのまもく

かり久又一ももさきと結構か
篇のついでかいせりりかく欲以
此切徳と云く一舞入のふくらを
わいしよくせり。能ふぶらで
おひであられと神田せりま
ごひーとせり。ひとあひら
又元の白本の管よあかく
此のよいま路やせり。いとう
よる篇よしん。芝のむとあひ
ぶつ篇代のこんりうと炭芝居
と一日仕切て見よよ。いりま

でもあぢい。いせしん。いりまが
あれども日本色。いりま。いりま。
まへひろいせうひぢぢ。いりま。いりま。
ありそよ存者。いりま。いりま。
いりま。いりま。いりま。いりま。
いりま。いりま。いりま。いりま。
このませぬよ。いりま。いりま。
いりま。いりま。いりま。いりま。
あこりせま。いりま。いりま。

上 ◆ 道心者 目下

いりま。いりま。いりま。いりま。

川舟ちうち舟の由日をも懐よ
ついでださぬ日よへさぐさうり
とハゴろう同立ますおつそり
門あきよをちくくとこついで
辰支とすらくとあさねす
[口]マアまハよいぐ途中で中るよ
あやとましまつうかせまやのこ
おいてゆひひこくそとひゆのや
まなまごろのまつうつとさびえ
けろはぢハよふあつく [又]お
こあこ斗りよふなつくつても皆

人が見ます大海をよてふせく
よふを人どや海一内のがつ
どんよまらまつしてせの日の海
名と色を懐よそあてあつてを
まらとハ志あ〜やう〜

▲道外形之部

上上 ① 津 扣 日本花

[又]これ〜いっ人ハゴこがびい
来ちあありゆ茶せんりのあ
[又]これハな俗人あれどもさう
やの産をさうけて一流のたかす

古人も^た志^ます^るより^も今^も慕^もと^もや
許^さす^まし^とり^のよ^うに^くさ^るる^者で^な
ある^まし^とり^の功^をか^つま^しめ^り
と^そあ^けひ^ゆえ^あく^とを^おと^す
の^不作^らす^まし^とり^の

上



高西念仏 日本丸

^取り^かへ^るま^しと^り
今^も分^かの^とも^とり^のよ^うに^く
お^んく^して^おひ^らす^まし^とり^の
お^んく^して^おひ^らす^まし^とり^の
お^んく^して^おひ^らす^まし^とり^の
お^んく^して^おひ^らす^まし^とり^の
お^んく^して^おひ^らす^まし^とり^の
お^んく^して^おひ^らす^まし^とり^の
お^んく^して^おひ^らす^まし^とり^の

い^まも^うよ^まし^とり^の
ま^しと^り
お^んく^して^おひ^らす^まし^とり^の

▲ 鏡花瓶之部

上^まま ^木 ^食 日本丸

^まま ^まま ^まま
あ^のが^らし^のハ^の味^がこ^の
入^るを^もつ^て師^のあ^まれ^と
雲^のち^がひ^のあ^まれ^と

出るとお入るまきせ今日八時迄は
でるおとよ夕飯をたいて高いは
出やちやれ水もくんで下され
おれ八時よ入て来るやどよおハ
くらせもう一えおいてをあとで
おしりひとまゆらの御堂できて
トさいとかんお入のまぎ〜と
ゆるうまをつらぬゆるらちよ
らのまおドまを急かざりて
ナチクヨクヤセニラてまぐくのを交
ぞーてさるまぎあまのまじ〜と

ゆのぢぢ おま そよひとぬののど
思はむらうなむらうの身まこと
いびつていら〜とよりハ大きを
塩けぞ おま ーとつらとらんを
あるあも吹れいの〜と〜と
ばしづいぶんまげとあく権その
た〜とま

▲ 若女飛之部

舞臺上言 一 向宗 日な花

ひいき 鬼神ハ殺してモよぎく
まことま 神信子けり 夜老

勢の張や、鬼の母が二人二人たを
けととん。夫ハ本の伊達ののげん
けととん。夫ハ本の伊達ののげん
犯のたあといふ者をつちの
幽の宗ハ徳の故の者のすくくの海の境の
あちと廿人とあかどとあまよ
まらまがれよあつていよをま
いあげあまよつとされまの
を故元もいふ家く。飯ま元ああ
おがれよまよとまらさとまら
えよあありと。いふの家の 既 七
よよござります。げいひのあま

かりまあよ。先はつ人のあつていハ
悪谷のあの子ぶんまえ。おまの
を故あり。いふと。ちうのまよん
上の風をあ。ハ宗の宗の混らん
た。そ中に我の宗を弘め
あくの送れ生のののをとまんと
正の依の偶をハつてりのあ。あのあ
まの送れ仙を社生ようのあ
ねがふのあのあのあのあの
よ。あのあのあのあのあのあの
くとき入りけハ南を不可思養

みて云よいよれぬ究りしこと。
今や世のくまんとどうと対生を
ね又と正のちどか加東のま意あ
ぢんい世大坂の女おたふかよつて
くもの只おい又まおの奥方ま
た青おびやりにするその心願
毎日くの大入まうひけんおを
あつて又こまらりおいら川
くくの若どうふも母おもをどし
だま後つぬま親のねまハ今ま
ありしついと云ますすびおま連


申さうかたせのつこののハは
人まつてく彼来ハるひ何ゆを
させんもあぶなげのをいんん
上上吉 田流 日本丸
[丸] 一向の賣子まどながら
げいふうがちと遠ひますそら
むりしつて香たをなされ地
養一そのりまてまも一流のまを
さんぞんこのど 市田丸
このの強地とあまな由まを
あつしつて大ありしこの人ハ
ついでまひといふひうまな人が

たぐく大牧く大やのそま
舞
舞
舞

上上吉  丘 青  花

 神  妙  妙  妙  妙  妙  妙  妙

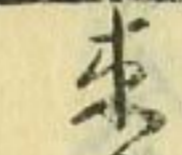


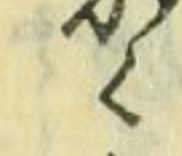
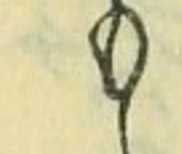

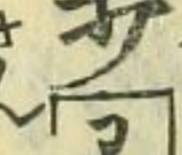
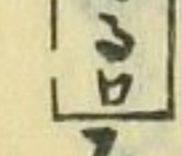
もも  妙  妙  妙  妙  妙  妙  妙  妙

ま  妙  妙  妙  妙  妙  妙  妙  妙

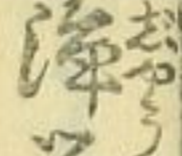

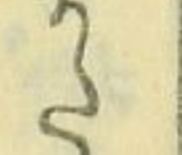
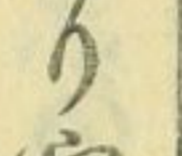
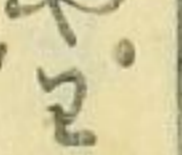
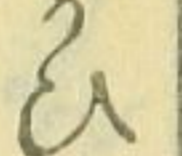

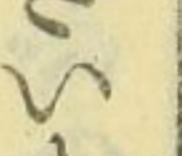
く  妙  妙  妙  妙  妙  妙  妙  妙

ま  妙  妙  妙  妙  妙  妙  妙  妙

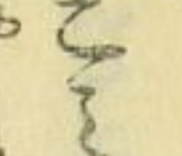
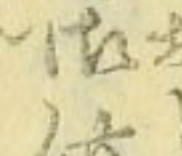

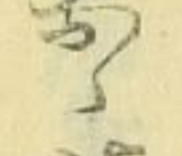
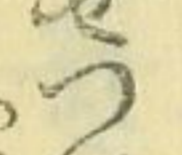
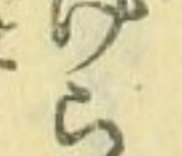

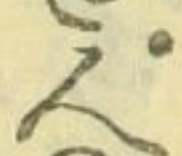
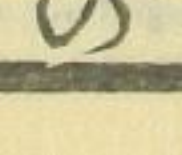
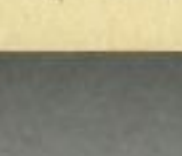
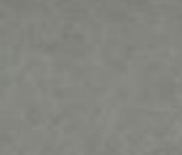
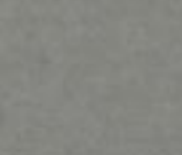
ま  妙  妙  妙  妙  妙  妙  妙  妙




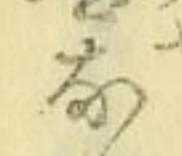


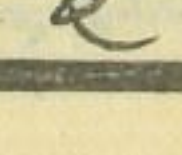


ま  妙  妙  妙  妙  妙  妙  妙  妙

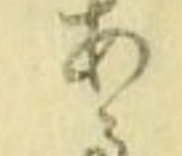

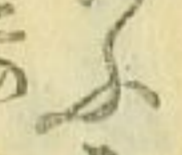



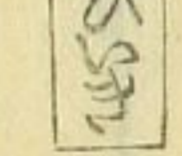


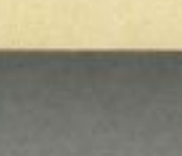

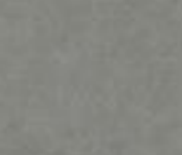
ま  妙  妙  妙  妙  妙  妙  妙  妙


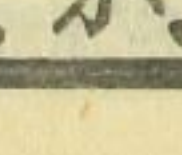
降る  理  ころ  や  ころ  ひ  め  ころ  と

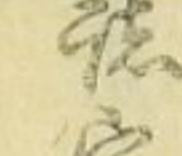
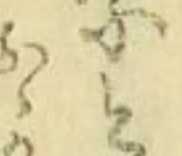



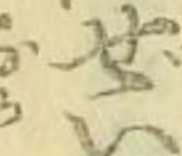

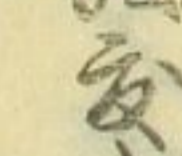


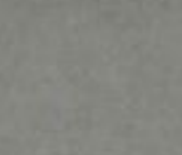
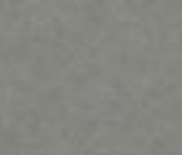
千代  け  て  二  人  と  も  よ  つ  れ  て  け

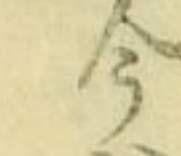

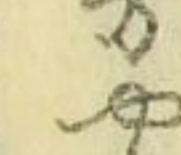

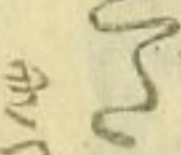
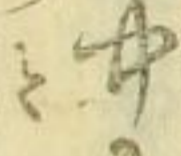
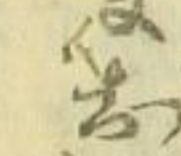

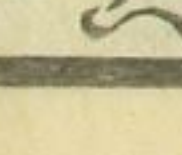

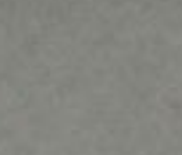
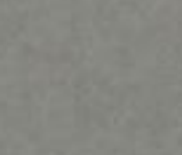
こ  ゝ  由  依  と  せ  つ  み  ら  れ  こ  人  の



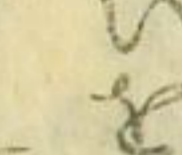
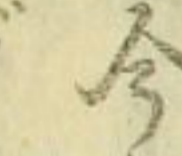
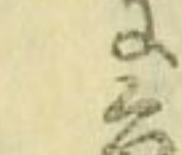





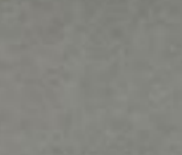
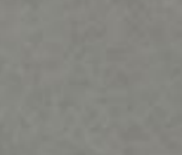
彼  人  の  ち  ゝ  ぬ  が  仕  合  あり  こと  是

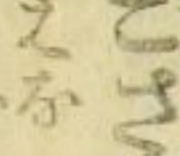

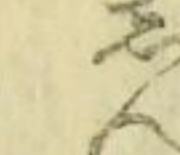
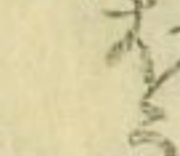
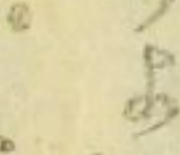


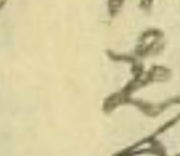


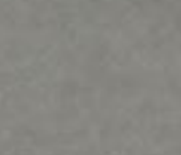
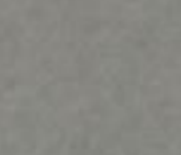
あ  ゝ  ころ  よ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ

あ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ

あ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ

あ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ

あ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ

あ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ

あ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ  ゝ

上上 ① 洞院立庄 日中元

ひきぬ あぐり念のろりりがいやの
こころの袖^{そで}のそりむんてんをそ
をひひぬきがきついのまね^{まね}まの
まふふいびりやうやハハハハハハ
なごの住持^{しうぢ}花女^{はなむ}もおよびなき
げいどうをよたののききん
みてあちあせかくもふもの^{もの}
こまがひあたまがけいんあん
いすました^まをひの改^{かへ}り
ことくにおきのぞく^{ぞく}はまの

あしだよたけさふころのひかり
どぞりあふて大ありもありし
うじん^{うじん}体た^{たい}もありんをい
おきのぞく

▲ 若元取立

上上 禪師 夜土

ひきぬ ^{ひきぬ}人ハハハハハハハハハハ
立取元もつあどく^くてさやの
ありありたりたり^{あり}をんや
こころの徳^{とく}をすよんを
飛^たびの字^じよりりり

ふき夕雲のおくくくお遠い
たりと急介あうらななる。そと
こうあやくのたまた。横あつて
糸をふりてひくして居らんと
あつく元まの信おまぶつ仙よ。お笠
系けいがありをあたりののどやとの
うふさはげふとうよりくらぬ
ことあづる。おきくう。すま
かめくま悪くまきく。お海あま路
うら長老く

上上 連 まは小僧 天の元

ひは人ハ若わ充あ方のこん元げんまく。
もやくおま。あう換かのよま。まを
りぬくや。狐きつねのまひや。まく。
ま似まや神ま樂んこ。らあう。ままを
六十むそお智ち七十しじの歌うたとのがま。く
おま。く。せま。ま。れい。の花はなさ。らの
喜かを。せ。く。ひ。ま。び。ぐ。り。せ。あ。く。い。ま
弘こう法ぼうハ。よ。な。どの。大だいあり。由よし。へ。せ。ひ
を。ゆ。ー。ま。ま。よう。で。

上上  海女あま花はな 日本にっぽん花はな

ひき いづれの若僧わかしゅを。も。た。げ。こ。ま

ありてはなれども。そのりつひく
 極^{ごく}入^いの^の付^つふ^ふの^の物^{もの}の^のひび^{ひび}の
 切^{きれ}の^のハ^ハま^まと^とよ^よも^もあ^あら^らな^ない^いわ^わら^らな^ない^い
 松^{まつ}の^の葉^はの^の際^{さい}の^のゆ^ゆら^らか^かさ^さの^のゆ^ゆら^らか^か
 清^{せい}香^{こう}の^のや^やつ^つの^のあ^あく^くハ^ハを^をね^ねん^んの
 大^{だい}あ^あら^らう^うま^まの^のい^い件^{けん}別^{べつ}を^をよ^よと^とぞ
 け^けぎ^ぎの^のう^うら^らま^まひ^ひぢ^ぢの^のあ^あん^んや^やの^の
 う^うら^らな^ない^いの^のら^らい^いた^たひ^ひの^のい^いそ^そう
 く^く衣^い袋^{ぶくろ}つ^つま^まの^のた^たの^のま^まや^やあ^あら^らう
 大^{だい}の^の波^{なみ}ま^まの^のあ^あり^りで^でお^おお^おう
 お^おの^のま^まを^をあ^あら^らう

上上 日書小信 日かた
 日^ひの^の代^{だい}系^{けい}の^のこ^この^のゆ^ゆら^らか^かさ^さ
 む^むら^らぬ^ぬれ^れの^のま^まの^のい^いそ^そう
 と^とか^から^らい^いく^く

上上 一向白宿 日かた
 一^{いつ}の^のま^まの^のい^いそ^そう
 ま^まの^のゆ^ゆら^らか^かさ^さの^のい^いそ^そう
 ま^まの^のゆ^ゆら^らか^かさ^さの^のい^いそ^そう

数巻軸

法相宗 天竺彦
 三論宗 天竺彦

既^レにさ^レんく^レ一^レか^レさ^レま^レる^レか^レま^レら
か^レひ^レど^レど^レり^レま^レち^レよ^レな^レる^レ無^レ後^レ夫
の^レ存^レで^レど^レり^レま^レす^レむ^レり^レま^レり
八^レ字^レの^レち^レよ^レあ^レい^レて^レあ^レる^レま^レり^レハ
中^レで^レ人^レの^レ俱^レ合^レや^レ中^レ二^レむ^レ人^レめ^レの
改^レ定^レな^レど^レり^レい^レふ^レ人^レを^レも^レめ^レく
ま^レん^レど^レり^レま^レす^レが^レ皆^レ高^レ時^レを^レ休^レで
よ^レふ^レく^レい^レふ^レ人^レを^レも^レめ^レく^レの^レ古^レを
で^レど^レり^レま^レす^レ若^レき^レ時^レ分^レハ^レ宗^レ良
法^レ師^レと^レい^レふ^レふ^レあ^レら^レぬ^レか^レひ^レと
あり^レ一^レが^レか^レ奉^レゆ^レハ^レ大^レ使^レも^レ又^レ云

あり^レず^レま^レあ^レは^レ後^レハ^レ推^レと^レを^レを
あ^レあ^レづ^レり^レぞ^レ氣^レよ^レ一^レは^レ一^レは^レ一^レ
今^レハ^レ勢^レの^レ能^レま^レま^レう^レぞ^レく^レせ^レて
南^レの^レつ^レむ^レり^レふ^レ斗^レさ^レ一^レて^レあ^レひ
あり^レも^レ一^レま^レは^レ因^レに^レさ^レて^レ大^レ
か^レい^レ今^レ一^レま^レの^レ言^レひ^レら^レを^レ又^レ
あ^レふ^レあ^レぞ^レの^レめ^レど^レえ^レと^レや^レま^レす
そ^レひ^レら^レを^レ又^レ一^レハ^レ実^レ憑^レあ^レう^レ
あ^レふ^レの^レ慶^レ勢^レよ^レお^レれ^レ一^レハ^レも
ぬ^レら^レた^レあ^レふ^レと^レま^レす^レ新^レ政^レの
あ^レら^レも^レか^レま^レま^レた^レを^レ志^レま^レひ

法義く まさくは老ぬれはさし
やう知 かしきしよりせもさ
ものつばさして大なるてあてさよ
又々ます器人くぐえさびりま
す。ぞいんくく
まきく 法なるは我神ふま
ひらまうてきんをりきふの中
もよく重のりも徳ともよこ教
三重三々氣一まきしき備あく
ふ来もあつむよこくも又大師
糸りのつづきまきとさくれく

めとさす 秘義のまきかみ
ふぐよさるのた王むれも治る
所代とるえく



諸宗尋判記 後編 末編ふのれこそ
評せり

を日公本録一ヤシ

裁板

徳宗評判記下巻終

下

十一

龍
目
下
虎
印



龍
目
下
虎
印

龍
目
下
虎
印

早稲田大学図書館

011488556098